

書 評

佐藤久夫 著

障害構造論入門—ハンディキャップ克服のために

中村 隆一（東北大学医学部附属病院鳴子分院）

本書は世界保健機関（WHO）が1980年に出版した「WHO 国際障害分類試案（仮訳）」（厚生省大臣官房統計情報部）以来、盛んになった「障害の3つのレベル」や「障害の階層」を巡っての考え方・理論を障害構造論と呼び、障害の分類にかかわる複数の提案とその批判とを紹介している。「序論：障害の構造的な理解ということ」に、「WHO 国際障害分類試案への道」、「WHO 国際障害分類試案」、「国際障害分類試案の普及と活用」、「国際障害分類試案への批判と修正動向」、「カナダモデル：ハンディキャップ発生プロセス」、「上田敏氏の障害構造論」の6章が続く。序論において、著者は障害者のかかえる困難を解決するという問題意識から、障害を医学的事象、困難を社会的問題と読み替え、その解決法に、①障害の医学的な予防と治療、②障害の影響を制限し困難を予防する、があると推論する。そして障害と困難との関連を構造の視点から捕らえようとする。著者の問題意識は、この段階で既にリハビリテーション医学で利用されている障害モデルを越えているように思える。その姿勢が複数モデル（国際障害分類、カナダモデル、上田理論）を中立的に紹介するのには有利になっているが、著者自身のモデルを提示するという段階には至らしめなかったのかも知れない。

い。見方を変えてみよう。構造論は障害およびその他、用語の概念規定を行い、関連する諸法則を記述することによって体系化をも行おうとすれば、取り組んだ問題の枠組みが大き過ぎるのではないだろうか。実際、歴史的な過程において提示されてきた複数モデルの解説でも、「医学的障害と生活上の障害」あるいは「医学的障害、機能的障害、社会的障害」などの言葉によって紹介され、同時にそれらへの批判が記されているが、それがどのような立場の相違でなされているかには、立ち入って説明していない。ここには客観と主観の一致を前提とした本質を求める科学としての医学と、個人で異なる生活の意味、実践的な生との対立がある。それを一つの構造論で括るのは無理であろう。この点は上田理論が「やまい（体験としての障害）」、すなわち「実存の次元における障害」を含むことを紹介しているのは正鵠を射ていると言えよう。ここで、簡潔な定義がないとの記述もあるが、現象学や解釈学から見れば、個別記載的であることに「体験としての障害」の意義であろう。リハビリテーションに携わる人々に、日々の障害論議に一石を投じた著書として一読を勧めたい。

（B 6 判 198 頁 2,369 円（税込）1992 青木書店刊）